

「青年海外協力隊・ニカラグア」

橋場 文香

HASHIBA Fumika

恵まれた環境、
苦しむ人々のために生かす

山に囲まれた静かな農村地帯、エステリ県。たばこの名産地で、ニカラグアの中では涼しく、過ごしやすい地域だ。約12万人が住む県都エステリは都会の雰囲気だが、少し離れると一面に緑のタバコ畑が広がる。「農村に多い土壁の家に住むサシガメという虫が、シヤールガス病を広めるんです」。橋場さんはそう指摘した。「土壁の割れ目などに隠れ、夜になると人の血を吸いに出できます。貧困層に多い病気で、ニカラグアでは人

JICA Volunteer Story

PROFILE

1988年大阪市出身。大学院で公衆衛生学を学び、卒業後、2013年10月から青年海外協力隊(感染症対策)としてニカラグアで活動中。



保健センターの職員と。潜伏期間の長いシヤールガス病には、長期的な対策継続が重要だ

「人々の幸せに寄り添い、病気を啓発」

サシガメが媒介する、中南米特有の感染症「シヤールガス病」。橋場文香さんはこの病気から人々を守るため、ニカラグア保健省と住民の間を取り持ち、各地で対話などの啓発活動を行っている。



口の4割が感染リスクの高い家に住んでいます」

橋場さんは高校で人権委員会に所属し、世界のストリートチルドレンについて発表した。その下調べの中で世界と日本の違いにショックを受けたことが、今の活動の根底にある。「恵まれた環境に生まれたのだから、世界中で苦しんでいる人たちに貢献したい」。そう考えた橋場さんは、英語を学ぶために高校2年のときにアメリカに留学。大学では英米語を専攻しながら、アメリカで心理学の学士号も取得した。

大学院では公衆衛生学を専攻。「多くの命を予防の観点から救える」というのが理由だった。エチオピアでJICAの感染症対策のインターンや母子保健に関する研究を行い、「現地の人と同じように生活し、現地の人への幸せの一助となる援助を手掛けたい」との思いから、草の根活動ができる協力隊に応募した。

おしゃべりで広げる理解、 住民と保健省を仲介

橋場さんは今、エステリ県の保健事務所で地域住民に対する啓発活動を行っている。字が読めない人でもわかる資料を使い、サシガメを見つけたら保健省に報告を促すようにチャルラを行う。チャルラとは「おしゃべり」の意味。医師や看護師が地元コミュニティで診療するときに同行し、小学校や保健センターで行ったチャルラはすでに100回以上で、延べ1万人以上に対策の重要性を説明してきた。出産・産後のリスクがある女性を一時的に受け入れる公共医療施設「お産を待つ家(カサ・マテルナ)」などでも行っている。

「シヤールガス病は、感染して1〜2週間後に発熱や頭痛などを起こしますが、その後しばらくは症状がなく、5〜20年ほど経つと心臓や消化器官がダメージを受けて、最悪の場合は死んでしまいます」と橋場さんは説



a. 保健センターでの啓発活動。サシガメの報告数増加につながると、うれしさもひとしおだ
b. 時には地元の家庭を訪問することも。ニカラグアの人たちはシャイだが、打ち解けるとやさしい
c. 県保健事務所の職員と住居訪問した際。冗談をかわせる仲
d. 保健事務所で、地元の子どもたちと。この子たちが将来苦しまないためにも、今、対策が必要とされている

明する。「怖い病気ですが、この地域には、シヤールガス病のほかにも Dengue 熱やチクングニア熱、下痢症など大量発生が起きやすい病気がたくさんあり、シヤールガス病への対策は後回しにされがちなんです」

シャイな地元の人たちと交流、 たくさん幸せ学ぶ

赴任当初、橋場さんの周りにいた保健省の職員は年上ばかり。橋場さんは「さまざまな感染症の対策に追われるスタッフの間で、部外者の私は仕事の話もなかなかできずに悩みました。ニカラグア北部の人たちはとてもシャイで、私が現地語に慣れていないこともあって会話もうまく続かず、苦労しました」と振り返る。それでも現地の人のニーズを探り、現場レベルの情報を把握して現地職員の負担を軽減したり、他のスタッフの見本になれるように積極的な啓発活動に取り組んだりすることで、少しずつ協力関係を構築していった。現地の人との交流でも、現地の生活や食文化に順応し、トルティヤの作り方を教わって一緒に食べたりのするなど、時間をかけて打ち解けていくことで、多くの幸せをもらえるという。「ニカラグアのために働いてくれてありがとう、と言われたときは、すべての苦労を忘れるほどうれしいと思えました」

日本からの派遣者という立場を生かして、住民に「サシガメを報告すれば、保健省が殺虫剤をまいてくれる」、保健省には「啓発活動を続けていけば、住民もサシガメを報告してくれる」と、お互いのすれ違いを埋められるよう努力している。保健センター内でも担当者の間を積極的に仲介し、連携の推進を図っている。

「私が帰国した後も、シヤールガス病の啓発・対策が続いていく環境を作りたい」という橋場さん。今日も、笑顔で現地の人たちと「おしゃべり」している。